また、承らせ給へる殿ばらは、
御けしき変はりて、益(やく)なしとおぼしたるに、
入道殿は、つゆさる御けしきもなくて、「私の
従者(ずさ)をば具し候はじ。この陣の吉上(きちじやう)
まれ、滝口まれ、一人を『昭慶門まで送れ。』と
仰せ言給べ。それより内には一人入り侍ら
む。」と申し給へば、「証(そう)なきこと。」と
仰せらるるに、「げに。」とて、御手箱に置か
せ給へる小刀まして立ち給ひぬ。
いま二所(ふたところ)も、苦む苦むおのおのおはさうじぬ。
「子四つ。」と奏して、かく仰せられ議するほど
に、丑にもなりにけむ。「道隆は右衛門の陣
より出でよ。道長は承明門より出でよ。」と、
それをさへ分かたせ給へば、しか
おはしましあへるに、中の関白殿、陣まで念じ
ておはしましたるに、宴の松原のほどに、そ
のものともなき声どもの聞こゆるに、ずちなく
て帰り給ふ。

また、天皇のご命令（勅命）をお受け申し上げなさった殿たちは、
お顔色が変わって、困ったことだとお思いになっておられるのに、
入道殿は、少しもそのようなご様子もなくて、「私の従者は連れていきますまい。この近衛府の陣の吉上でも、滝口の武士でも、（誰か）一人に『昭慶門まで送れ。』とご命令ください。そこから中には（私）一人で入りましょう。」と申し上げなさると、（帝は）「（それでは、道長が行った）証拠がないことだ。」とおっしゃられるので、「なるほど（ごもっともでございます）。」と言って、（帝が）御手箱に置きなさっている小刀をお借りして立ちなさった。
もうお二人（道隆・道兼）も、しぶしぶそれぞれお出かけになった。
「子四つ（午前0時半）。」と役人が申し上げて（から）、このようにおっしゃられて、相談しているうちに、丑の刻（午前1時~3時）になってしまったのだろう。「道隆は右衛門の陣から出よ。道長は承明門から出よ。」と、
それ（出口）までお分けになられたので、その通りにお出かけになったが、中の関白殿（道隆）は、右衛門の陣までは我慢していらっしゃったが、宴の松原のあたりで、何とも得体のしれない声が聞こえるので、どうしようもなくてお帰りになった。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/